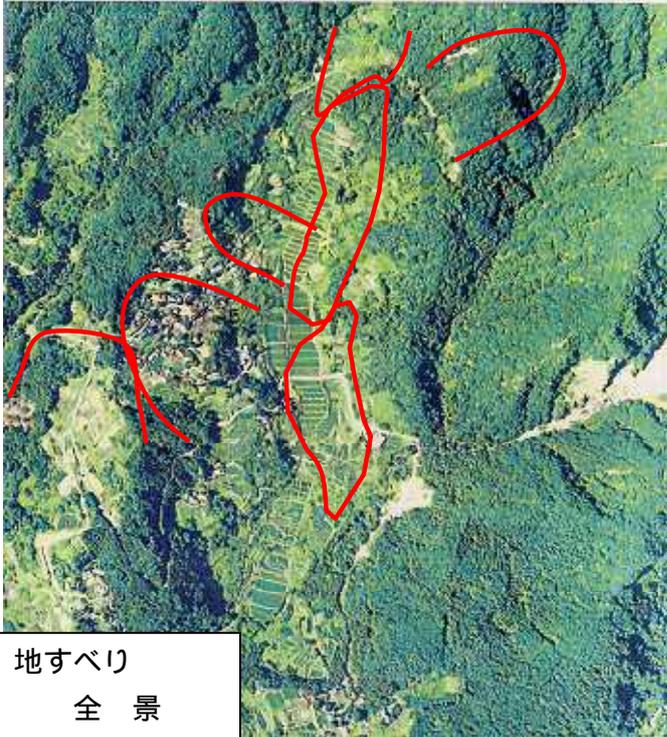


あじまめ

味大豆地すべり（長野県上水内郡小川村）



地すべり
全 景

（アクセス方法）

長野駅西口より車でR19号を大町市方面へ30分



地すべりの概要（キーワード：歴史的地すべり・地すべり監視モデル）

味大豆地すべりは、小川村北東部飯縄山東側の薬師沢の上流部に位置する。主ブロックは南北に長い沢型の地すべり地形をなし、従属する地すべりブロックが主ブロックの東西に存在している。主ブロックの地すべり規模は、長さ650m、幅70～90m、深さ5～15m、土塊量5万 m^3 と推定され、地質は、飯縄山を中心とした山陵部に第三紀鮮新世の安山岩質の凝灰角礫岩が分布し、主ブロックは泥質岩で構成される。

当該地の活動履歴は古く、文化13年（1816）に大規模な地すべりが発生し、弘化4年（1847）の善光寺地震では崩壊性の地すべりが発生した記録がある。また、地すべり地は耕作地として利用されていたが、流路が安定しなかったため荒廃が激しく、その対策として、明治19年に内務省直轄砂防事業により、地すべり地内を通る薬師沢支川己り地沢（わりちさわ）を中心に石張水路等の対策工事（有形文化財）が行われており、これが本県における最初の地すべり対策工事となった（富吉地すべり）。さらに、大正9年に地すべり末端付近、昭和8年に主ブロック西側の従属ブロックで木杭打工が民営施工された。

しばらく地すべり活動は小康状態であったが、昭和49年に主ブロック上部ですべりが顕著化したため杭工等が施工されたが、昭和52年には地すべり活動がさらに活発化し、杭工が被災するとともに県道や公民館等が全壊する被害となった。このため、昭和53年度から平成15年度まで集水井工、杭工、横ボ-リング工等が施工され、現在は小康状態を保っている。

地すべりの早期発見、警戒避難体制を目的として、平成9年度に「地すべり監視モデル事業」により自動観測システムを整備し、当地域に建設された「味豆地すべり観測センター」に地中伸縮計、地下水位計等の観測データを集約し、地すべり変動を監視している。また、当地域は、度重なる災害に見舞われてきたため、明治18年に住民から選出された砂防惣代を中心に内務省へ工事の請願が行われるなど、古くから砂防事業に取り組んできた地域であり、同センターには、これらの長年にわたる工事、維持管理等の貴重な記録を保管、展示しているとともに、地域の災害防止活動の拠点となっている。



己り地沢に施工された石張水路



味大豆観測センター



地すべりの諸元

発生：文化13年（1816年）ほか

長さ：約650m

幅：約70～90m

土量：約5万m³

地すべり深度：約5～15m



昭和 20 年頃

主な対策

・集水井 ・鋼管杭 270 本 ・水路工 ・谷止工